

# 中国における大学生の進路志向と学習行動

高 静

(2012年10月2日受理)

Career Expectations and Learning Behavior of Undergraduate Students in China

Jing Gao

**Abstract:** In China, while the problem of undergraduates' job shortage aggravated, it came to be said that the study in college is not helpful. Therefore, the quality in higher education came to be a big issue, and universities are required to improve the quality of education. This paper aims to figure out how undergraduates are learning at the university and how the process is different with their career expectation. On the basis of a study survey, this paper examines the following two points as research issued: 1) How the undergraduates learning at the university and what about their ideas about the course after graduate. 2) How the learning behavior of the undergraduates is different with their career expectation. The main findings are as follows: 1) there are three patterns about the learning behavior of undergraduates in China. One is to study positively, but be tortured for the meaning of study, in order to employ in employment efficiently. The second is to study negatively because the course after graduate has not been decided. And the third is that the learning behavior is not related with their career expectation, for it is thought to be not helpful to the early occupational attainment. 2) The relevance between undergraduates' learning behavior and their career expectation is influenced by the rank of a university. Their learning behavior is much better in the high rank university.

Key words: China, undergraduate students, career expectations, learning behavior

キーワード：中国，大学生，進路志向，学習行動

## 1. 研究目的と課題

本研究の目的は中国の地方都市における大学生の進路志向と学習行動の実態を把握し、両者の関連を検討することにある。

1994年から2004年までの10年間に行われた大衆化教育の推進は、中国全国の大学卒業者を4倍に増加させるという成果をあげた。その一方で、大学卒業者の就職率は23.1%も低下したことが指摘されている<sup>1)</sup>。深刻化しつつある大卒者の就職難問題は、大学に入学さえすれば卒業後の職業が保証されるという従来の幻想を破ることになった。それを反映し、「大学で勉強しても就職できない」という「学習無用論」が社会世論

として広がり、大学への進学志望率の低下をもたらしたとされる(胡・黄, 2010など)。それは中国の学歴社会の根幹を揺るがすほどのものではないが、大学での学習の就職への効用は疑われるようになった。さらに、大衆化による大学のレジャーランド化が進み、大学生の質の低下が批判される(張, 2006など)と、大学教育と職業との接続の問題が一層重視されるようになった。このことは、その反面で大学と大学での学習を就職に直接結びつける功利的な考え方を学生のなかに産み出すことになった。すなわち、中国の大学生は就職のために義務的に勉強に取り組むようになったといえる。

それでは、実際に中国の大学生は卒業後の進路につ

いてどのように考え、それが大学における学習行動とどう関わっているのか。本論では、大学生の進路志向とその学習行動との関連を分析することで、中国で迷走する大学生の実態を検討する。

このような関心に基づく研究はこれまで日本で数多くなされてきた（例えば西本2008, 山田2010）。しかし中国においては、いまだ十分に実証的な研究が行われていないのが実態である。中国での大学生活と大学生の就職に関する研究は、専門性教育の硬直化などの大学システムによる大卒就職難の深刻化というマクロな視点に留まっているものが多い（劉2009, 王2004, 蘇2000）。また、その多くは理念の提示にとどまり、実証的な論述に欠けたものが多い。ミクロな視点で大学生活と就職を取り扱ったのは李鳳蘭（2008）がある。彼女は大学生の社会活動の欠如とサークル運営の非正規性について指摘し、大学生が就職の際の履歴書を書くために社会活動、とりわけサークル活動に取り組むことを量的調査によって明らかにした。この研究は大学生が大学生活への取り組みと就職との関係を考えるには大きな意味があると言える。しかし、その調査で明らかになったのは一部の地域の実態だけであり、そのほかの地域、とくに非大都市圏を見る必要がある。また、サークル活動に焦点を当てたものであるため、大学生活の主軸をなす学習生活について触れられていない。

そこで、本研究は中国の山東省という地方都市における大学生の進路志向と学習生活への取り組みの実態をアンケート調査の結果を用いて分析する。また、両者がどのような関係を持っているかに関して考察したうえで、中国における大学システムの課題について検討を行う。

## 2. 調査の概要と研究の枠組み

本調査は2011年8月から9月にかけて、大学教員に協力を依頼し、授業時間にアンケート用紙を配布、回収した形で行われた。調査対象は中国の山東省に所在する3つの大学の3, 4年生、計1,000名にアンケートを配布した。調査地域を地方都市とした理由は、今までの先行研究に大都市やエリート大学の大学生を対象としたものが多く見られる（王2005, 李2011）一方で、地方の大学生の就職意識に対する調査は十分に行われているとは言えない。地方の大学生の就職意識は大都市出身、または大都市での生活経験を持つ大学生と異なる傾向を示すものだと考えられる。

表1 サンプルの構成

大学	学部	学年	サンプル数	有効回収率	女性の割合
A大学	工学部	3年生	96	64.0%	15.2%
		4年生	109	72.7%	5.1%
B大学	文学部	3年生	89	59.3%	75.8%
		4年生	117	78.0%	83.4%
C大学	文学部	3年生	88	88.0%	77.3%
		4年生	95	95.0%	73.7%
	数学部	3年生	80	80.0%	57.0%
		4年生	97	97.0%	69.8%
合計			771	77.1%	57.6%

アンケートの回収率は77.1%であった。対象とした3大学の全国における順位はそれぞれ、A大学が16位、B大学が142位、C大学が210位<sup>2)</sup>であり、国立、省立と市立という階層的構造になっている。

調査対象の構成は次の通りである。3大学の割合としてA大学が26.6%、B大学が26.7%、C師範大学が46.7%であり、C師範大学の比重が大きい。また、性別は、42.4%が男性、57.6%が女性であり、専攻別は、47.7%が文科系、52.3%が理科系、学年は45.8%が3年生、54.2%が4年生である。表1はサンプルの構成を表すものである。

## 3. データの分析

### 3.1 大学生の進路志向と学習行動の実態

大学生の学習行動と進路志向との関連を検討するために、まず、中国の大学生はどのような進路を志望しており、また、どのように大学での学習に取り組んでいるかについて、概観しておこう。

中国の大学生の進路志向として主に国有セクター、私有セクターと進学、また起業や国外での就職などが挙げられる。国有セクターには主に政府機関、政府機関の下請けである事業単位<sup>3)</sup>と国有企業、研究機関がある。国有セクターで就職する場合、安定性と高い収入のほか福利厚生が保障され、社会的地位も高い。私有セクターには主に外資企業と国内の私営企業がある。現代的な経営理念に基づき、待遇がよく、規模も大きい外資企業と比べて、中国国内の私営企業は未熟で中小規模のものが多く、安定性を欠いていると考えられている。また、学歴社会を反映して進学を志望する者も多く、それには国内での大学院進学と海外留学がある。そのほか、大卒就職難の解決策として提唱されるようになった「起業」も大学生の興味を引いている。さらに、グローバル化の進む中、国外での就職も大卒者の進路の選択肢となっている。このことを踏まえながら表2を概観しておこう。

表2は大学生の進路志向を示したものである。この

表2 大学生の進路志向(%, 複数選択)

	政府機関	事業単位	国有企業	外資企業	研究機関	国内の私営企業	国内進学	海外留学	起業	国外就職	こだわらない	分らない	その他
志望する	42.5	65.9	50.6	31.83	15.4	15.8	43.4	11.1	18.0	6.1	6.3	3.1	0.7
志望しない	57.5	34.1	49.4	68.17	84.7	84.2	56.6	88.9	82.0	93.9	93.7	96.9	99.3
合計	100.0 (710)	100.00 (710)	100.0 (710)	100.0 (710)	100.0 (710)	100.0 (710)							

表からわかるように、地方都市の大学生の進路志向は国有セクターへの就職、および国内進学に偏っている。

65.9%の大学生が「事業単位」、50.6%が「国有企業」、42.5%が「政府機関」と、4～6割の大学生が研究機関を除く国有セクターでの就職を志向していることがわかった。その中でも事業単位の志望者がとくに多くなっていた。これは1つには師範大学の大学生に教員志望が多いことによる。もう1つの要因としては、公務員をめぐる厳しい就職競争の存在が挙げられよう。公務員試験をめぐる競争の厳しさに圧倒され、公務員志望の大学生は事業単位すなわち政府の下請けだが、待遇や社会的地位も公務員に近い職業を志望するようになったのだろう。また、国内進学を志望する大学生は39.9%と学歴社会の特徴を表している。そのほか、起業の志望者は2割近くであり、外資企業の志望者は3割近くであった。

ただし、次の表3からわかるように、進学志向のある大学生では、国内進学と就職を同時に志望する者が大半を占めている。

表3は、表2で示された進路志向に対する複数回答の結果を就職するか進学するかで割り当てた結果を示している。国外留学の性格が国内進学と大きく異なるため、ここでいう「進学」は国内進学に限定することにした。表3からわかるように、これまで進学志望者の多さが指摘されてきたが、進学だけを志望する大学生はわずかであった。

「進学のみ志望する」大学生は3.9%だと極めて低い値を示している。それに対して、「就職と進学の両方を志望する」大学生は42.3%であった。進学を志望する大学生の9割は、同時に就職を志望していることがわかる。中国における大学院入学試験と大卒者の就職活動の時期がずれていることは、大学生が受験勉強と就職活動を同時に取り組むための環境を提供している。中国の大学生の多くは進路志向が曖昧で、「様子見」の姿勢を取っている。

では、進学志向の大学生は同時にどのような就職先を志望しているだろうか。表4は進学志向を持つ大学生が同時にどのような就職先を志望しているかを示し

表3 就職するか進学するか(%)

就職のみ志望する	進学のみ志望する	就職と進学の両方を志望する	合計
53.8	3.9	42.3	100.0(667)

ている。進学志向の大学生は、私営企業以外の幅広い就職先を同時に志望していることがわかった。進学を志望する大学生の72.4%が事業単位を志望するのに対して、進学を志望しない大学生は61.0%であった。また、「政府機関」への就職志望において、進学を志望する大学生は47.4%であるのに対して、進学を志望しない大学生は38.8%であり、進学志向の大学生は政府機関での就職を志望している。同じ傾向は外資企業や研究機関にも見られた。一方、私営企業において有意な差が見られなかった。上述したように、国有セクター、または私有セクターの中の外資企業は待遇のよい就職先として考えられている。進学と就職を同時に志望する大学生は待遇のよいセクターへの就職を志望することがわかる。高い進学志望は、就職難の中でよりよい就職先を確保しようとする中国の大学生の思惑によるものだとわかる。進路志向が曖昧なままで、就職活動と大学院の受験勉強の両方に取り組み、よりよい結果を得たほうに進むという、中国の大学生の姿勢がうかがえる。それは就職難の深刻化および社会状況の激変による、就職状況の不透明さに原因があると考えられる。就職状況が捉えられない中、一部の大学生が待遇の良さを求めて進路選択にとまどう姿が窺えよう。

以上でわかるように、中国の大学生は進路選択にとまどっており、また、就職を確保するための道具として功利的に大学院進学を捉えている。このような進路志向を持つ大学生は、どのように大学での学習に取り組んでいるのだろうか。表5は中国の大学生の学習に対する取り組みを示している。この表からまじめに学習に取り組む大学生が多い一方、大学における学習の意味に疑問を持ち、授業への出席に苦痛を感じる者も目立っていることがわかる。「興味のある科目がある」に「とてもあてはまる」「少しあてはまる」と回答した者は71.1%であり、また「積極的に教養科目に出席

表4 進学志向を持つ大学生が同時にどのような就職先を志望しているか (%)

	政府機関+			事業単位*			外資企業*			研究機関**			私営企業		
	はい	いいえ	合計	はい	いいえ	合計	はい	いいえ	合計	はい	いいえ	合計	はい	いいえ	合計
進学する	47.4	52.6	100.0(308)	72.4	27.6	100.0(308)	37.3	62.7	100.0(308)	20.8	79.2	100.0(308)	14.6	85.4	100.0(308)
進学しない	38.8	61.2	100.0(402)	61.0	39.0	100.0(402)	27.6	72.4	100.0(402)	11.2	88.8	100.0(402)	16.7	83.4	100.0(402)

※ P<0.01 は\*、P<0.001 は\*\*、P<0.05 は+。以下同様。

表5 大学における学習行動 (%)

	とてもあてはまる	少しあてはまる	どちらでもない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	合計
よく予習・復習する	12.5	28.8	21.8	31.3	5.6	100.0(696)
よく勉強について討論する	6.9	27.3	24.8	34.6	6.5	100.0(696)
専攻関連の本をよく読む	11.1	37.8	23.9	23.6	3.6	100.0(696)
必要のない授業を履修しない	6.2	25.0	23.1	35.1	10.7	100.0(696)
資格を取るために勉強することが多い	10.2	36.4	22.9	27.1	3.5	100.0(696)
授業の出席を苦痛に感じる人が多い	6.5	23.0	24.8	35.4	10.4	100.0(696)
積極的に教養科目に出席する	12.0	41.2	27.1	17.0	2.7	100.0(696)
興味のある科目がある	21.8	49.3	19.3	8.5	1.2	100.0(696)
自分が成績のいいほうだと思う	9.1	33.6	29.6	23.7	4.0	100.0(696)
大学における勉強に意味が見出せない	12.6	30.0	27.4	22.9	7.0	100.0(696)

する」は53.3%、「専門関連の本をよく読む」は48.9%であった。このように大学生の多くがまじめに勉強に取り組む一方、42.7%の大学生は「大学における勉強に意味が見出せない」に「あてはまる」と回答している。「無用」だと考えていなくても、中国の地方都市における大学生の4割以上が勉強の意味を疑っていることがわかった。また、「必要ない授業を履修しない」は31.2%、「授業への出席を苦痛に感じる人が多い」は29.5%でこれらも決して低い値ではなかった。

以上の分析からわかるように、中国の大学生の多くは卒業後の進路に対して、志望が曖昧なままで、「様子見」の態度を取っている。また、かれらは大学での学習にまじめに取り組んでいる一方、勉強の意味に疑問を抱えている。中国の大学生の多くは卒業後の進路にも、在学中の学習生活にも迷走する姿が窺えた。次節では、そのような迷走する中国の大学生の実態について、さらなる分析を行いたい。

### 3.2 大学別にみる進路志向と学習行動

本節では、大学・文理科別に大学生の進路志向と学習行動を分析する。

表6は各大学・文理科の大学生の進路志向を示したものである。大学ランクは大学生の進路志向に大きく影響することがわかった。

表6 大学・文理科における進路志向の分布 (%)

	就職のみ志望する	進学のみ志望する	就職と進学の両方を志望する	合計
A 大学 (理科)	72.6	2.5	24.8	100.0(157)**
B 大学 (文科)	54.6	4.3	41.1	100.0(185)
C 大学 (理科)	41.3	5.2	53.5	100.0(155)
C 大学 (文科)	47.1	3.5	49.4	100.0(170)

ランクの低いC大学の学生で、「就職と進学の両方を志望している」のは文理科それぞれ49.4%と53.5%であるのに対して、ランクの最も高いA大学は24.8%であり、大学ランクの低い大学生は進学を志望する同時に就職を志望していることが分かる。また、卒業後「就職のみを志望する」において、A大学は72.6%であるのに対して、C大学の文理科はそれぞれ47.1%と41.3%であり、大学ランクの低い大学生に就職のみを志望する者が少ない。大学ランクの低い大学生が就職において比較的不利におかれているため、ランクの高い大学の学生と比べて、就職のみを志望することにリスクを感じていることに原因があると考えられる。そのため、C大学の学生は進学と就職を同時に志望し、大学院に進学することによって大学ランクの不利を補おうとしている。

また、大学生の学習行動の平均値を大学・文理科別に比較した結果を表7に示す。大学生の学習行動にお

いて、大学ランクだけでなく、文理科による影響も大きく見られた。

「よく予習・復習する」において、A大学の理科生は3.75であるのに対して、C大学の理科生は3.12であった。同じ傾向は「よく勉強について討論する」にも見られている。A大学の大学生は大学での学習に積極的に取り組んでいることがわかる。しかし、一方で、C大学の理科生は「授業の出席を苦痛に思う」において2.89であるのに対して、A大学生は3.39であり、A大学の大学生は授業の出席に苦痛を感じていることがわかった。また、C大学の理科生が「必要のない授業を履修しない」において2.72であるのに対して、A大学生は3.27であり、A大学生のほうが学習に功利的に取り組んでいることがわかる。A大学の理科生は大学での学習に自主的に取り組む一方、学習に強い功利性が見られ、授業の出席を苦痛に思っている。それに対し、同じ理科生であるC大学の学生は学習に対してそれほどの積極性が見られず、むしろ専門知識の学習に消極的な態度が伺えた。文科生の場合、「資格のために勉強する」以外に大学ランクの差が見られなかった。

では、大学・文理科別に見られたこれらの進路志向、または学習行動の実態は、お互いどのように関連しているだろうか。次節では、大学生の進路志向と学習行動との関連を分析したうえで、中国における大学教育と就職との接続について検討しよう。

### 3.3 進路志向と学習行動との関連

以上の分析では、中国の大学生が進路志向、および大学での学習行動において迷走していることがわかった。では、学習に対する取り組みは大学生の就職意識を反映しているだろうか。大学生の高い国有セクター・進学志望は彼らの学習意欲を高めることができるのだろうか。本節では、大学生の進路志向と学習行動との関連について検討する。

大学・文理科の影響を考える前に、まず、進路志向と学習生活の関係を全体的に把握しておこう。表8は大学生の具体的な進路志向と学習行動との関連を示すものである。

表8で示したのは、表5中の「とてもあてはまる」を5、「全然あてはまらない」を1として計算した平均値を進路志向別に比較したものである。まったく異なる性格を持つ国有セクター、私有セクターおよび進学の志望者が共に消極的に学習生活に取り組んでいることがわかった。政府機関を志望する大学生で「よく予習・復習する」の値が2.96であるのに対し、志望していない者は3.24であり、政府機関を志望する大学生ほど予習・復習に熱心ではないことがわかった。また、政府機関を志望する学生で「よく勉強について討論する」の値が2.77であるのに対し、志望していない者は3.23であり、政府機関を志望する大学生ほどよく討論しないことになる。それと同じ傾向は外国企業、進学にも見られた。政府機関での就職、つまり公務員試験は知識量と臨機応変の対応力、外国企業は実践や思考能力が求められ、進学においても、受験のためには専

表7 大学・文理科別に見た大学生の学習行動

	理科			文科		
	A大学	C大学		B大学	C大学	
よく予習復習する	3.75	3.12	**	2.77	2.91	
よく勉強について討論する	3.56	2.85	**	2.63	2.77	
専門関連の本を読む	3.5	2.77	**	3.35	3.53	
必要のない授業を履修しない	3.27	2.72	**	2.58	2.73	
資格のために勉強する	3.51	3.31		2.81	3.37	**
授業の出席を苦痛に思う	3.39	2.89	**	2.46	2.54	
教養科目に出席する	3.68	3.27	**	3.31	3.47	
興味のある科目がある	3.73	3.60		3.92	4.01	
成績がよいほうである	3.32	3.01	*	3.31	3.15	
大学における勉強に意味が見いだせない	3.36	3.17		3.11	3.11	

表8 進路志向と学習行動との関連

	政府機関		外国企業		国内進学				
	志望している	志望していない	志望している	志望していない	志望している	志望していない			
よく予習・復習する	2.96	3.24	*	2.87	3.23	**	2.94	3.24	*
よく勉強について討論する	2.78	3.06	*	2.77	3.02	*	2.8	3.04	*
授業の出席に苦痛を感じる人が多い	2.7	2.87		2.73	2.83		2.57	2.97	**

門知識より「政治」力と「英語」力を測る全国の統一試験が重視される。以上の分析を踏まえれば、進路志向が明確になるほど大学での学習に取り組まないのは、大学における専門教育が大学生の進路志向の達成に機能していないためだと考えられる。

では、どのような大学生が積極的に学習に取り組んでいるのか。それは大学と文理科にどのような影響を受けているのか。次に、大学または文理科を考慮した上で、大学生の進路志向と学習行動との関連をさらに分析する。

大学または文理科別に、大学生の進路志向と学習行動との関連を分析した結果、両者の関連はごくわずかしみ見られなかった。それは表8の分析結果に対応するものだと考えられる。中国の大学教育が大学生の進路志向の達成に機能していないため、進路志向と学習行動との関連は極めて限定的なものだと見受けられる。ただし、「就職するか進学するか」と学習行動との関連について分析した結果、大学によって関連性が多く見られた。

表9は大学生が「就職するか進学するか」による学習行動の平均値の比較を、大学・文理科別に見た結果を示している。「進学のみを志望する」大学生のサンプル数は数人しかいなかったため、ここでは扱わないことにする。

A大学の場合、大学生の学習行動は「就職するか進学するか」によって大きな差が見られた。「よく予習・復習する」において、「就職のみ志望する」大学生は3.92であるのに対して、「就職と進学の両方を志望する」大学生は3.36であった。同じ傾向は「専門関連の本をよく読む」「成績がよいほうである」や「資格のために勉強する」にも見られており、「就職のみ志望する」大学生のほうが大学での学習または資格の取得に積極的に取り組んでいることがわかる。

一方、「就職のみ志望する」大学生で、「授業の出席を苦痛に思う」のは3.56であるのに対して、「就職と進学の両方を志望する」A大学の学生は3.05であり、

就職のみ志望するA大学の学生は授業の出席を苦痛に思っている。また、「就職のみ志望する」大学生で、「勉強に意味を見いだせない」のは3.54であるのに対して、「就職と進学の両方を志望する」大学生は2.90であった。就職のみ志望するA大学の理科生は大学での勉強または資格の取得に積極的に取り組んでおりながら、授業を苦痛に思い、学習の意味を疑っている。

勉強または資格の取得に積極的に取り組んでいるのは、大学生が大学で学ぶ専門知識や大学での成績、取得した資格を卒業後の就職に生かそうとしているためだと考えられる。一方で、大学での学習に苦痛を感じ、学習の意味を疑うのは、専門知識を中心とした中国の大学教育が大学生就職との間にギャップが存在するためだと考えられよう。卒業後すぐに就職することを志望するA大学の学生は、大学での学習を就職に生かそうと考えながらも、それと就職とのギャップによって勉強の意味に疑問を感じている。それも、かれらが大学院への進学を志望しない原因だと考えられよう。

一方、進学と就職を同時に志望するA大学の学生が大学での学習にそれほど積極性を示していないのは、進路が決めていないという目標の不明確さに原因が考えられる。就職に一筋な大学生と違い、就職と進学を同時に志望する大学生は進路志向を複数持つことに「余裕」を感じたのかもしれない。進学と就職を同時に志望することは、大学生のモラトリアム化によるものだと考えられ、それは大学での学習に消極的な影響を及ぼしていると言えよう。

以上の分析からわかるように、就職のみを志望するA大学の学生は学習に積極性を示す一方、勉強の意味を疑い、学習に迷走する姿が見られている。それに対して、進路志向が曖昧なA大学の学生は大学での学習に積極性が見られなく、モラトリアム状態に陥っているように見受けられる。

B大学とC大学の場合、大学生が「就職するか進学するか」とその学習行動との関連はわずかにしか見られなかった。ランクの低い大学生は進路志向の達成

表9 「就職するか進学するか」と学習行動との関連

	A大学(理科)			B大学(文科)			C大学(理科)			C大学(文科)		
	就職のみ	就職と進学	*	就職のみ	就職と進学		就職のみ	就職と進学		就職のみ	就職と進学	*
よく予習復習する	3.92	3.36	*	2.8	2.74		3.22	2.94		2.96	2.87	
よく勉強について討論する	3.68	3.26	+	2.66	2.62		2.97	2.72		2.78	2.8	
専門関連の本を読む	3.66	3.08	*	3.38	3.37		2.68	2.73		3.51	3.54	
必要ない授業を履修しない	3.39	3.08		2.67	2.61		2.75	2.66		2.96	2.46	*
資格のために勉強する	3.63	3.31		2.87	2.77		3.46	3.28		3.4	3.36	
授業の出席を苦痛に思う	3.56	3.05	*	2.58	2.28		2.95	2.86		2.66	2.37	
教養科目に出席する	3.76	3.59		3.35	3.21		3.54	3.11	*	3.45	3.56	
興味ある科目がある	3.75	3.79		3.98	3.91		3.63	3.66		3.96	4.11	
成績がよいほうである	3.44	3.03	+	3.33	3.33		3.17	2.91		3.09	3.2	
勉強に意味を見いだせない	3.54	2.9	*	3.27	2.91	+	3.16	3.16		3.13	3.06	

を、大学での学習を結びつけていないように見受けられる。それは大学ランクの低さによる就職の不利が、大学生の学習アスピレーションを冷却させたことに原因にあると考えられる。そのため、大学ランクの低い大学生は大学院進学を敗者復活の手段として志望した。大学ランクの制限が、ランクの低い大学生の進路志向が大学院進学と就職の間に揺らぐ1つの原因として考えられよう。

以上を踏まえれば、大学生の進路志向と学習行動との関連は、大学または文理科によって異なり、ランクの高い大学において関連が大きいことになる。ランクの高い大学の学生のほうが、その進路志向と学習行動と結びつけていると考えられる。ただし、ランクの高い大学に進路志向と学習行動との接続が見られたものの、その間には大きなズレが存在しており、決して好ましい関連だとは言えない。

#### 4. まとめと考察

中国の大学生の進路志向と学習行動について、本研究で得られた主な知見は下記のとおりである。

第一に、進路志向として、中国の大学生の多くは就職活動と大学院の受験勉強の両方に取り組むことを考えており、進路志向の曖昧さがうかがう。また、学習行動として、まじめに学習に取り組む大学生が多い一方、大学における学習の意味に疑問を持ち、授業の出席に苦痛を感じる者も目立っている。

第二に、進路志向として、大学ランクの高い大学生は卒業後「就職のみ志望する」に対して、ランクの低い大学生は「進学と就職の両方を志望する」。また、学習行動として、大学ランクの高い大学生は大学での学習に積極的に取り組みながらも、その意味を疑い、強い功利性が伺えた。

第三に、大学ランクの高い大学生の場合に進路志向と学習行動との関連が最も多く見られ、進路に迷走する大学生は大学での学習に積極性が見られない一方、学習に積極性を示す大学生はその意味を疑い、学習に迷走する姿が窺えた。

大学ランクの低い大学生には、進路志向と学習行動との関連が見られなかった。それは学歴格差が大きい中国では、出身大学のランクが大卒者の就職に大きく影響すると認識されていることに背景があると考えられる。ランクの低い大学が教育理念を明白に提示し、大学生の学習を動機づけることが望まれよう。

一方、進路志向と学習行動との関連が多く見られたランクの高い大学生にも問題が伺えた。卒業後の進路志向を就職に絞ったA大学の大学生は大学での学習

にまじめに取り組みながらも、その意味に疑惑を感じている。ランクの高い大学において、大学の教育がその就職と接続しているものの、学生の進路達成に十分に機能しているとは言えない。このように一般に語られる「学習無用論」が大学生の間にも浸透していることがわかる。

また、就職と進学の両方を志望するA大学の学生は消極的にしか学習に取り組んでいないことがわかった。大学生の一部はモラトリアムに陥っているように見受けられる。また、就職を志望する大学生が積極的に学習に取り組み、進学を志望する大学生が学習に消極的であることから、大学生が大学教育を就職のためだと功利的にとらえていることがわかる。その功利性はランクの低い大学の学生が進路志向と関係なく大学での学習に消極的に取り組んでいることからもうかがえる。かれらは進路志向の達成を大学での学習より、大学院進学などに託しているように見受けられる。

それにもかかわらず、全体として、多くの大学生はまじめに勉強に取り組んでいる。それは学歴社会に育ったある種の学校化した行動だと考えられる。また、大学による就職支援および専門教育以外の学校文化が未熟であるため、大学生が学習により厳しい就職現状に対する無力感から逃れようとしていることにも原因があると推測できる。それは進路志向が確定した大学生がよりまじめな学習行動を示したもう1つの原因だと考えられよう。

以上を踏まえると、中国の大学生の学習行動に3つのパターンが見られることになる。まず学習の意義に疑問を感じ、苦痛に思いつながらも、就職のために積極的かつ功利的に取り組むパターンである。次に大学院進学と就職の間に揺らぎながら、大学での学習に消極的な態度を取るパターンである。最後に、大学での学習を進路志向と全く無関係なものとして、学校化された行動を取るパターンである。

本論では中国における大学生の進路志向と学習生活との関連を通して、大学教育と就職との接続について検討した。そこから、中国の大学教育は大学生の進路の達成に機能していないだけでなく、大学での学習の意味を十分に提示できていないことが指摘されよう。そのため、大学生は大学での学習動機を見失い、学習または進路志向に迷走しているように伺えた。それが「学習無用論」の浸透につながったと考えられよう。それを防ぐために、大学システムの改善、および大学としての教育理念の提示が促される。また、学歴・大学ランクにとらわれず、多様化した採用基準を推奨することも、大学教育の価値づけに有効だと考えられる。

本論は中国における大学生の進路志向と学習行動の

実態、およびその関連性を、大学・文理科を考慮したうえで分析したが、本分析では検討できなかった課題として大学生の属性、とりわけ出身階層や性別などによる影響が考えられる。それゆえ、大学生の進路志向と学習行動との実態を探るには、さらに属性などの影響について考察する必要がある。また、上述した仮説を証明するには、学習行動だけではなく、大学生活全般に対する考察も必要であろう。こうした課題には、今後、分析を進める中で応えたい。

## 【注】

- 1) 中国教育部 <http://www.moe.edu.cn/> (2009年10月31日アクセス)
- 2) 2011年、中国校友会が「科学研究」「人材育成」「総合評価」を基準とするに作成したランキングに依拠する。<http://www.gaokao.com/e/20110118/4d34ffcbbcf15.shtml> (2012年6月20日アクセス)
- 3) 事業単位は政府機関の下請けであり、おもに学校、郵便局や銀行などがある。

## 【参考文献】

- 池本淳一、「大卒青年の就業問題とアスピレーション」『日中社会学研究』第15号、2007年、pp.91-109。
- 王傑、「学部生の進路志向における家庭的背景の影響—中国の4大学を事例として—」『教育社会学研究』No.76、2005年、pp.245-263。
- 王智新、『現代中国の教育』明石書店、2004年。
- 小方直幸、『大卒者の就職と初期キャリアに関する実証的研究—大学教育の職業的レバンス—』広島大学大学教育研究センター、1998年。
- 小方直幸、『大学から社会へ—人材育成と知の還元』玉川大学出版社、2011年。
- 苅谷剛彦、『学校・職業・選抜の社会学』東京大学出版会、1991年。
- 苅谷剛彦、『キャンパスは変わる』玉川大学出版部、1995。
- 葛城浩一、『大学全入時代における学生の学習行動—「ボーダーフリー大学」を中心にして—』博士学位請求論文、2009年。
- 胡偉莉・黄華文、读书无用论的反思：基于大学生就业难的视角』『成人教育』第2期、2010年。
- 蘇真、「二十一世紀に臨む中国高等教育—制度と問題点—」、『日本・中国 高等教育と入試』中島直忠、2000年。
- 武内清、『キャンパスライフの今』玉川大学出版部、2003年。
- 武内清、『大学とキャンパスライフ』上智大学出版、2005年。
- 張紀濤・夏占友、「中国における教育市場の変化—現状、特徴と問題点—」『城西大学経営紀要』第6号、2010年、pp.25-52。
- 張小紅、「当代大学生学习动机现状与原因分析」『成都信息工程学院学报』第5期、2006年。
- 登坂学、「中国における高等教育普及と就職難」『九州保健福祉大学研究紀要』(8)、2007年、pp.35-44。
- 中島直忠、『日本・中国 高等教育と入試』玉川大学出版部、2000年。
- 西本佳代、「大学生の学習行動に及ぼす就職意識の影響」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第3部第57号、2008年、pp.125-132。
- 藤井泰・山田浩之編、『地方都市における学生文化の形成過程』松山大学地域研究センター、2005年。
- 本田由紀、『教育の職業的意義』筑摩書房、2009年。
- 溝上慎一、『現代大学生論—ユニバーシティ・ブルーの風にゆれる』日本放送出版協会、2004年。
- 溝上慎一、『学生の学びを支援する大学教育』東信堂、2007年。
- 山田浩之、「地方大学における学生の学習行動と学習意識—大学の学校化がもたらす学習の形骸化—」『比治山高等教育研究(3)』、2010年、pp.37-48。
- 李敏、『中国高等教育の拡大と大卒者就職難問題』広島大学出版部、2011年。
- 李鳳蘭、「社会转型期大学生与社团状况的調查及对策研究」『中国電力教育』、2008年、中国電力教育協会。
- 劉建華・劉敏、「高校学生社团研究及理論思考」2009、<http://www.xslx.com/Html/kjwh/201004/12944.html> (2010年12月17日アクセス)。(主任指導教員 山田浩之)